The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	金(ゴールド)を修飾する色彩語について : 黄色か赤色か紫色か?
Author(s)	尾崎, 久男
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 21-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

金(ゴールド)を修飾する色彩語について：黄色か赤色か紫色か？ *

尾　崎　久　男

Das Ziel des vorliegenden Beitrags ist eine Voruntersuchung zum Idiom "rotes Gold" in der japanischen Sprache, um zu erfahren, welche Farbe das Gold der Japaner hat. Es wird der Versuch unternommen, dieses Idiom in der mittelalterlichen Literatur zu untersuchen. Wenn man all die Beweise berücksichtigt, liegt der Schluß nahe, daß "feines Gold" wahrscheinlich den Japanern wirklich "rot oder rötlich" aussah. In dieser Arbeit wird dieses Idiom nicht genug in den indischen oder chinesischen Sprachen untersucht. Falls dort sehr ähnliche Ausdrücke allgemein verwendet werden sollten, müssen sie vom interdisziplinären Standpunkt aus betrachtet werden.
キーワード：赤い黄金，純金，紫磨黄金

I

本論は，日本語を母語とする話者にとって「金(ゴールド)」が何色に見えていたかを通時的な観点から論じるものである。中世ゲルマン語学を専門とする筆者は，数年前に中世印欧語における「赤い黄金」について調査結果を発表した(尾崎久男(2006))。一見したところ，意味的に矛盾するかのようなこの表現は，ゲルマン語(ただし，ゴート語は除かれる)では幅広く，かなりの頻度で使われていた。ところが，試験的にロマンス諸語を概観すると，不思議なことに使用例が皆無であった。さらに，筆者の調査が及んだ限りでは，古典および中世ラテン語でもわずかに３例(８世紀のイギリスの神学者ベーダ(Beda)による『イギリス国民教会史』に１例(Scribi euangelii praecepit in ordine libros, / Ac thecam e rutilo his condignam condidit auro;)および10世紀のザンクト・ガレンの修道士エッケハルト１世(Ekkehart I)による『ヴァルターの歌』(*Waltharius*)に２例(Armillas centum de rubro quippe metallo / Factas transmittam, quo nomen regis honorem. および Quod si consentis, iam nunc ditatus abibis / Eulogiis, rutilo umbonem complebo metallo.)見られるが，両者共にゲルマン人である点が非常に興味深い)用いられているに過ぎなかった。そこで，この表現はゲルマン特有ではないかと思われたが，イラン(フェルドウスィーが著した『王書』(*Šāh*

nāmah)), ケルト(ウェールズ語で書かれた『マビノギオン』(*Y Mabinogion*)), スラブ(ロシア語червонный(ch'ervónnɨj)を参照)語派にも存在するため，やはり普遍的な言い回しだと考えられる。ところで，日本語では古くから金は別名「おうごん」あるいは「こがね(上古では「くがね」または「きがね」)」，銀は「はくぎん」あるいは「しろがね」と呼ばれ，現代社会においても一般には前者は黄色，後者は白色というイメージが色濃く残っており，動かし難い既成概念が成り立っている。ところが，このテーマに関する限り，筆者は古今東西でそれほど差異は存在しないという視座に立っている。そこで，その試みの一つとして本論は，成立年代やジャンルを問わず，日本語で書かれた文献からできる限り多くの用例を引用することにより，金は黄色であるという固定観念に一石を投じるものである。最終的には，中世ゲルマン社会と同様に，日本においても「純金」の場合，黄色よりもむしろ赤色に近いということを，実例に則しながら証明してみたい。

まず，現代の日本語話者にとって視覚的に金は何色に感じられるものであろうか。ごく一般的に言えば，日本語では以下のように定義されるであろう：

(01)『広辞苑』第六版 きん【金】

(呉音はコン)①(gold)金属元素の一種。元素記号 Au 原子番号七九。原子量一九七・〇。石英鉱脈の中または川の砂中に単体として産し，銅鉱・鉛鉱などにも含まれる。**黄色**の光輝ある金属。重く軟らかで，延性および展性に富み，空気中で錆びず，普通の酸に侵されず，王水に溶ける。比重は一九・三。産出の少ないこと，光輝の美麗なことで貴金属の随一とされ，貨幣・装飾品・歯科治療材・電子工業部品に用いる。南アフリカ・カナダ・ソ連などに多く産出。こがね。おうごん。・・・⑨こがね色。**黄色**。

あまつさえ，「こがね」を参照すると，現代の「こがね」は奈良時代に「くがね」と発音されていたようであり，「くがね」＞「こがね」と発音が推移したという情報が得られる。これは，日本語では古来「金＝黄色」であったという裏付けになる：

(02)『広辞苑』第六版 こ-がね【黄金・金】

(「こ」は「**き(黄)**」と同源。奈良時代は「くがね」)①おうごん。きん。②金の貨幣。金貨。③「こがねいろ」の略。――いろ【黄金色】黄金のように**黄色**に光る色。きんいろ。こんじき。

もちろん，これは「おうごん」という漢語の影響を受けていることも否めない。ところが，もともと日本語には赤，黒，白，青の四色しか存在せず，黄色は赤色の下位区分と見なされる(ちなみに，若尾五雄(1994:18)によれば，鉱夫間の隠語では「黒百足＝鉄」，「**赤百足＝金，銅**」，「白百足＝銀」，「縞百足＝その他の鉱石」となる)『古事記』(歌謡を含めて)には「黄」が１２回出現するが，その内訳は「黄泉」が１１度，「蒲黄」が１度である。以下は，金の記述が見られる唯一の箇所だが，やはり「黄」は用いられていない：

(03)『古事記』(岩)仲哀天皇

ここに大后神を歸せたまひて，言教ひ覺し詔りたまひしく，「西の方に國有り。**金**銀

を本として，目の炎耀く種種の珍しき寶，多にその國にあり。吾今その國を歸せたまはむ。」とのりたまひき。

これとは逆に，『日本書紀』(歌謡を含めて)では「黄金」がしばしば現れるが，これは上述のように，漢文で書かれた影響によるものと考えられる。さらに，『万葉集』を調査すると，「黄」が９６回現れるが，その内訳は「黄葉」が８４度，「黄泉」が４度，そして「黄楊」が６度である。ところが，最も頻繁に起こる「黄葉」は実際には「もみち」と読んでいたため，黄色よりはむしろ赤色のイメージである：

(04)『白文 万葉集 上巻』(岩)/『新訓 万葉集 上巻』(岩)

137　秋山爾　落**黄**葉　須臾者　勿散亂曾　妹之當將見

秋山に落つる**もみち**葉しましくはな散り亂ひそ妹があたり見む

1094　我衣　色服染　味酒　三室山　**黄**葉爲在

我が衣色服染めむ味酒を三室の山は**もみち**せりけり

2183　鴈鳴者　今者來鳴沼　吾待之　**黄**葉早繼　待者辛苦母

雁がねは今は來鳴きぬわが待ちし**もみち**早繼げ待たば苦しも

『白文 万葉集 下巻』/『新訓 万葉集 下巻』

3224　獨耳　見者戀染　神名火乃　山**黄**葉　手折來君

ひとりのみ見れば戀しみ神名火の山の**もみち**葉手折りけり君

4259　十月　之具禮能常可　吾世古河　屋戸乃**黄**葉　可落所見

十月時雨の常か吾背子が屋戸の**もみち**葉ちりぬべく見ゆ

また，以下の通り『古事記』の場合と同様に，『万葉集』でも金には色彩修飾語が付されていない：

(05)『白文 万葉集 下巻』(岩)/『新訓 万葉集 下巻』(岩)4097

須賣呂伎能　御代佐可延牟等　阿頭麻奈流　美知能久夜麻爾　**金**花佐久

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に**金**花咲く

(06)『白文 万葉集 上巻』(岩)/『新訓 万葉集 上巻』(岩)803

銀母　**金**母玉母　奈爾世武爾　麻佐禮留多可良　古爾斯迦米夜母

銀も**金**も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも

結果的には，実質上『万葉集』で黄色を表しうる例としては，以下の箇所が挙げられるのみということになる：

(07)『白文 万葉集 下巻』(岩)/『新訓 万葉集 下巻』(岩)3888

奥國　領君之　染屋形　**黄**染乃屋形　神之門渡

奥つ國領く君が染屋形**黄**染の屋形神の門渡る

しかしながら，この場合も航海に纏わる難儀を回避する目的と考えられるため，以下の例が示す通り，文字通り黄色と解釈するよりも，赤色(の土で厄除けした)と見なした方が無難である：

(08)『古事記』(岩)清寧天皇

物部の，我が夫子，取り佩ける，**大刀の手上に**，**丹畫き著け**，**その著緒は**，**赤幡を載り**，**立てし赤幡**，**見ればい隱る**，山の三尾の，竹をかき苅り，末押し縻かすなす，八絃の琴を調ふる如，天の下治めたまひし，伊邪本和氣の，天皇の御子，市邊の，押齒王の，奴末。

(09)『風土記』(岩)逸文 播磨の國

播磨國風土記に曰はく，息長帯日女の命，新羅の國を平けむと欲ほして下りましし時，衆神に禱り給ひき。その時，國堅めましし大神の子，爾保都比賣の命，國造石坂比賣の命に著きて敎り給ひしく，「好く我が前を治め奉らば，我こゝに善き驗を出して，ひひら木の八尋鉾根底附かぬ國，少女の眉引きの國，玉匣かゞやく國，苫枕寶ある國白衾新羅の國を，丹浪もちて平伏け賜はむ」と，かく敎り賜ひて，**こゝに**，**赤土を出し賜ひき。その土を天の逆鉾に塗り**，**神の舟の艫舳に建て**，**又**，**御舟の裳と御軍の著たる衣とを染め**，**又**，**海水を攪き濁して渡り賜ふ時**，**底潛る魚**，**及高飛ぶ鳥等も往來はず**，**前に遮へざりき。**かくして新羅を平伏け訖へて，還り上らして，すなはちその神を紀伊の國の管川の藤代の峯に鎭め奉り給ひき。

(10)『白文 万葉集 上巻』(岩)/『新訓 万葉集 上巻』(岩)1376

山跡之　宇陁乃眞**赤土**　左丹著者　曾許裳香人之　吾乎言將成

大和の宇陀の眞**赤土**のさ丹著かばそこもか人の吾を言なさむ

(11)『土佐日記』(岩)

船にのりはじめし日より，**船には紅濃くよき衣きず。**それは「海の神に怖ぢて」といひて。なにの葦蔭にことづけて，老海鼠の交の貽貝鮨，鮨鮑をぞ，心にもあらぬ脛にあげてみせける。

ちなみに，時代は下るが，以下の引用例に現れる「黄なる涙」という表現にも非常に興味が引かれる。これは恐らく「血」の涙を流すという意味であろうが，血液を表す色彩語として赤色ではなくて黄色が選択されている：

(12)『王堂本 曾我物語（下巻)』(岩)巻第七

「汝，馬の中の将軍なり。然るに，父の敵に志深し，父の取られける野辺に，我を具足せよ」と言ふに，**黄なる**涙を流して，高声にいばえけり。

(13)『王堂本 曾我物語（下巻)』(岩)巻第十一

「我，五百人の子を持ちて候ふ，其の中にも，乙子こそ，殊に不便に候ひしを，物に取られ失ひて候ふ。余りに悲しみ候ひて，至らぬ隈も無く，尋ねて候へども，我等が神通にては，尋ね出だすべしとも覚えず。然るべくは，御慈悲を以て，教へさせ給ひ候へ」とて，**黄なる**涙を流しけり。

(14)『太平記』巻第三十二

早く其弓を引其矢を放て我を射殺し，報国の賞に預れ。」とて，**黄なる**涙を流しつゝ，

「爰を射よ。」とて自口をあきてぞ臥たりける。
このように大雑把に鳥瞰しただけでも，古代・中世に生きていた日本人の目に金が実際に黄色く映っていたかどうかという疑問が生じてくる。

Ⅱ

金に限らず，金属というものを海外からの輸入に頼っていた日本にとって，それらが国内で産出するというのは一大事件であった。以下に見る通り，銀は６７５年，銅は７０８年に国内(前者は九州地方，後者は関東地方)で初めて採取に成功したという記事が残っている：

(15)『日本書紀（五)』(岩)巻第二十九 天武天皇

三月の庚戌の朔丙辰に，対馬国司守忍海造大国言さく，「**銀始めて当国に出でたり。**即ち貢上る」とまうす。是に由りて，大国に小錦下位を授けたまふ。**凡そ銀の倭国に有ることは，初めて此の時に出えたり。**故，悉に諸の神祇に奉る。亦周く小錦より以上の大夫等に賜ふ。

(16)『続日本紀宣命』(岩)元明天皇 改元の宣命（和銅元年正月十一日）

春正月乙巳，武蔵の國秩父郡より**和銅**を獻ず。詔りしたまはく・・・

如是治め賜ひ慈び賜ひ來る天つ日嗣の業と，今皇朕が御世に當りて坐せば，天地の心を勞しみ，重しみ，辱み，恐み坐すに，聞し看す食國の中の，東の方武藏國に，**自然に作成れる和銅出でたりと奏して獻れり。**

都が平城京に遷されてから３年後の７１３年５月２日，一つの詔が下された。これは中央集権を目指す大和朝廷による，いわゆる『風土記』撰進の詔であり，これを受けて各国で編纂が行なわれた(今日まで大部が伝えられるものは，わずかに出雲，常陸，播磨，肥前，豊後の五カ国に過ぎない)これによれば，当時の日本では銀および銅のみで金は産出していなかった：

(17)『續日本紀』巻第六 元明天皇（訳：講）

畿内七道諸國郡郷名著好字。其郡内所生。**銀銅**彩色草木禽獸魚虫等物。具錄色目。及土地沃瘠。山川原野名号所由。又古老相傳舊聞異事。載于史籍言上。

(畿内と七道諸国の郡･郷の名称は，好い字をえらんでつけよ。郡内に産出する**金･銅･**彩色(絵具の材料)・植物･鳥獣･魚･虫などのものは，詳しくその種類を記し，土地が肥えているか，やせているか，山・川・原野の名称のいわれ，また古老が伝承している旧聞や，異った事がらは，史籍に記載して報告せよ。)

(ちなみに，講談社学術文庫『日本書紀』では銀が金と現代語訳されている)銀の産出から４０年が経過した７４９年，渡来人らの大活躍によって金が国内で初めて採取されたという報告がなされた：

(18)『続日本紀宣命』(岩)聖武天皇 盧舎那佛の前に白さしめ給へる宣命 (天平勝寶元年四月朔日)

敕して左大臣橘宿禰諸兄を遣はして佛に白さしめたまはく,

三寶の奴と仕へ奉る天皇が命らまと,盧舎那の像の大前に奏し賜へと奏さく,此れの大倭の國は,天地の開闢けしより以來に,**黄金は人國より獻ることは有れども,斯の地には無き物と念へるに**,聞し看す食國の中の東の方,陸奥國守從五位上百濟王敬福い,部内少田郡に,**黄金出でたりと奏して獻れり。**

(19)『続日本紀宣命』(岩)聖武天皇 陸奥國に黄金出でたる時下し給へる宣命 (同日)

從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣る・・・

かく治め賜ひ惠び賜ひ來る天つ日嗣の業と,今皇朕が御世に當りて坐せば,天地の心を勞しみ,重しみ,辱み,恐み坐すに,聞し食す食國の東の方,陸奥國の小田郡に**金出でたりと奏して進れり。**

これは日本の歴史上,一大センセーショナルな事件であった。仏教に篤い信仰を持っていた聖武天皇は東大寺に盧遮那仏を建立しようとしたが,その鍍金に不可欠な金の不足にかなり頭を悩ましていた。すると,適時に東北地方で金が産出したという知らせが届き,天皇は年号を天平勝宝へ変更するほどに喜んだのである。この出来事はさまざまな文献によって伝えられるが,ここでは『今昔物語集』から引用すると:

(20)『今昔物語集 本朝仏法部 上巻』(角)巻第十一 第十三

今は昔,聖武天皇,東大寺を造りたまふ。銅をもちて居長□丈の盧舎那佛の像を鑄させたまへり。それに隨ひて大きなる堂を造りおほひたまへり。・・・

堂塔みな出で來ぬ。大佛をすでに鑄すゑたてまつれば,塗りたてまつらむ料に金多くいるべし。この國にもとより金なければ,震旦に買ひにつかはす。

遣唐使につけてさまざまの財を多くつかはす。明くる年の春,遣唐使かへり來て,多くの黄金積みてたてまつりければ,すみやかに佛師を召していそぎ塗らる。色**練色**なり。わづかに御□下足らず。いかにいはむや,多くの堂塔の金物,塗るべき物,かず知らず多かり。天皇,かなしび歎きたまふこと限りなし。

・・・その後,いくばくのほどを經ずして,陸奥の國,下野の國より色**黄なる**砂をたてまつれり。鍛冶どもを召して吹き下さるに,實に色めでたく,こく**黄なる**金にてあり。公,喜びたまひて,重ねて陸奥の國へ召しにつかはすに,多くたてまつれり。その金をもちて大佛に塗りたてまつる。その金多く餘りたれば,それをもちて□みな塗りはてぬ。

かの震旦の金は□色**練色**にして□明らかなり。この國の金の出で來れるはじめなり。

１２世紀前半に成立したとされる『今昔物語集』は説話文学というジャンルに含まれるため,８世紀の出来事を直接描写してはいないが,上例は本論にとって重要だと考えられる

記述である。すなわち，

１．日本では鍍金に十分な金が不足していたため，中国からの輸入に多く頼っていた，

２．遣唐使が中国から持ち帰った金は**淡黄色**であり，決して上等なものではなかった，

３．東北地方で産出した砂金は精錬させてみると，非常に色が良く**濃い黄色**であった。

以上のように，金は良質になればなる(＝純度が上がる)ほど，黄色から赤色に近くなるのではないだろうか。

そもそも本論の切っ掛けとなったのは，１７世紀中頃に吉田光由が著した和算書『塵劫記』であり，岩波文庫の本文に付された以下の注であった：

(21)『塵劫記』(岩)第十六 金両がへの事

（ここに金とあるは判金すなわち大判。上方は銀通用だから大判との交換が問題となる。判金一枚の重さが四十四匁だから，判金一枚の銀の相場を四十四匁で割ると金一匁の値段(銀)が出る。このため四十四で割る割り声がある。**大判は主として贈答用に用いられる。色を美しくするため銅を多くまぜ，品質は小判より低い。**したがって大判十両は小判七両二分に当る。首代七両二分など，七両二分が用いられるのは，実は大判一枚である。大判と銀，小判と銀の両替が別の条になっているのは，大判と小判の品位が異なっていることによる。）

一方，同時期に松江重頼が著した俳書『毛吹草』では，現代人と同様に，やはり金には黄色，より正確に言えば山吹色というイメージが見て取れる：

(22)『毛吹草』(岩)巻第三 付合

金　　佛　太刀　**山吹の花**　**菊**　瓜　虫　薄　瓦

それでは，もとより高価な金に銅を混ぜて品質を落としてまで外見をより美しく(＝赤味を帯びた黄色に)見せようとしたのは，一体全体，いかなる目的によるものであろうか。これについて筆者は，金の純度を上げて「純金」に見せる目的以外に他ならないと考えたのである。そこで，次の試みとして「赤金」という表現について『広辞苑』と『日本国語大辞典』を参照した：

(23)『広辞苑』第六版 あか-きん【赤金】

赤色を帯びた金と銅の合金の俗称。金にシアン化銅カリウムを加え，銅成分二五～五〇パーセントにした硬い合金。装飾物・鍍金用。

(24)『日本国語大辞典』第二版 あか-きん【赤金】

［名］ 金に銅を二五～五〇パーセント含ませた合金。**赤色**を帯び，硬い。装飾品などに用いられる。

どちらも等しく「銅との合金」と定義しているのみである。ここまでの展開は，尾崎(2006)の時と同じである。E. Anderson (2000)は*yellow*と同語源の*gold*に*red*を冠することを「意味的な謎」としている。ところが，筆者は同語源ゆえに意味的冗長を避けるべく*yellow gold*という表現が存在しないと考えた。さらに，筆者は*gold*と*red gold*とは全くの別

物であり，*red*は金と「純金」を区別すべく用いられたと結論付けた。これはギリシア語*χρυσος*(chrusos)を語源とする英語*chrysanthemum*やラテン語*carne*に由来する英語*carnation*にも同様のことが言える。彼の理屈に従えば，白い(黄)菊や白い(赤)カーネーションが「意味的な謎」になってしまう。また，日本人にとって「リンゴ」と言えば，一般的に赤色の果物というイメージがあるが，品種によっては黄緑色のリンゴもある。そこで，日本語では前者を「リンゴ」，後者を「青リンゴ」と呼んで区別するのである。

日本語には「赤金」という表現が見られないが，同じアジアの中国語では，以下にあるように「純金」を意味することが分かる：

(25)『岩波 日中辞典』じゅんきん【純金】

chúnjīn（純金），**chìjīn（赤金）**，zújīn（足金），**zúchì（足赤）**.

この言い回しは，１９世紀中頃の喜田川守貞の筆になる考証的随筆『近世風俗志』の記述にも見られる表現である：

(26)『近世風俗志(守貞謾稿)(一)』(岩)巻之八（貨幣）

金銀銅の海外諸国に没入の事　古より万国に信を通じ，あるひは交商をなして金銀銅の海外に齎し去りしこと，計へ知るべからず・・・

文化二年に至る二十二年の間，金六百六十四貫四百二匁余，**足赤金**・八程金・九程金・安南金・西蔵金等の数品あり。その総計なり。

ちなみに，明代に生まれた陽明学の創始者王陽明の語録および書簡集『伝習録』(１６世紀成立)には，金から不純物を取り除けば(すなわち，精金(＝純金))，その色が変化して「足色」に至るという記述がある：

(27)『伝習録』(岩)巻之上

猶ほ**精金**の精たる所以は，但だ其の成色足りて銅鉛の雑無きを以てなるが如きなり。人は天理に純なるに到りて方に是れ聖，金は**足色**に到りて方に是れ精なり。

この「赤金」に関する情報は，本論にとって非常に有意義だと認められるが，他方，中国語で一般に赤色を表す「紅」ではなくて「赤」が選択される理由もとても興味深い。ところが，同じアジア大陸でも，古代インドの場合，中国とはまったく事情が異なっていたようである(およそ紀元前４世紀の文献から)：

(28)『カウティリヤ 実利論（上)』(岩)第二巻 第一三章 貴金属庁における黄金長官

ジャンブー河から採れるもの，シャタクンバ[山]から採れるもの，ハータカから採れるもの，ヴェーヌから採れるもの，シュリンガシュクティで採れるもの，天然の純金として生じたもの，[金製造]液により[黄金に]変えられたもの，鉱山から生ずるもの。以上が金[の種類]である。**蓮糸の色**をし，柔軟で，滑らかで，音をたてず，光り輝く[金]が最上である。**赤黄色**のものは中位で，赤色のものは最低である。・・・

鬱金色をした純金の一スヴァルナが標準金である。それから一カーカニーの銅を置換して行って，四[マーシャカ]の限界に至るまで，十六の[段階の]標準金がある。

以上のように観察してくると興味は尽きないが，本論考は金を修飾する色彩語を日本語において調査するものであり，中国語やサンスクリットの文献調査も不十分なため，残念ながら今後の研究に委ねることとしたい。

今回の調査では，「赤金」という固定した言い回しは見付からなかったので，(20)に挙げた『今昔物語集』の例にあるように，色の濃淡に注意しながら，「(純)金のように赤い」などの比喩表現を収集を試みたが，以下の(33)も(20)と同様に，かなり注目に値する：

(29)『今昔物語集（八)』(講)巻九 第卅六

文本，此を得て，「此，何者ぞ」と問ふに，仁蒔答へて云く，「鬼の用ゐる所，人と異也と云へども，鬼，専らに黄金及び絹を用するが故に此を送る也。但し仮の物也と云ふとも吉し。然れども如かじ，**黄なる色**を以て錫を塗りて金を造り，紙を以て絹帛として尤も用す可し」と。文本，此の教へに随ひて造り儲けたりけり。

(30)『今昔物語集 本朝仏法部 下巻』(角)巻第十六 第二十九

妻，「さればこそいひつれ。さりとてあるべきことにあらず」といひて，夫と二人，この死人を持つに極めて重し。力を發して持つになほ重ければ，怪しむで死人を捜るに極めて固し。されば木の端をもちて指すに，金のやうなり。その時に，火を燃して小石をもちて扣けば中は**黄なり**。よく見れば金にてあり。

(31)『今昔物語集 本朝仏法部 下巻』(角)巻第十七 第四十四

僧いと怪しく思ひて，寄りてやはら衣を搔き去けて見れば，子はなくして大きなる枕ばかりなる石あり。僧怖ろしく氣疎くおぼゆれども，明りになして見れば，その石に**黄なる**光あり。よくよく見れば金なりけり。童は失せにければ，その後，僧，面影に立ちてありつる有様戀しく悲しくおぼえけれども，ひとへに鞍馬の毘沙門のわれを助けむと謀りたまひたるなりけりと思ひて，その後，その金を破りつつ賣りてつかひけるに，實によろづ豐かになりにけり。されば，**もとは黄金といひけるに，それより後子金とはいふにやあらむ。**

(32)『今昔物語集 本朝世俗部 上巻』(角)巻第二十六 第十四

主これを見るに，すべき方おぼえざりければ，底は白砂にて淺き小河の流れたりけるに下り立ちて，鞭の先を以て水の底の砂を，とかく搔き立てりければ，鞭の先に**黄なる**物のありけるを，何ぞと思ひて搔きまはすに，圓なる物にて鞭の廻されければ，やはら砂を搔きのけて促れて見るに，小瓶の口に見なしつ。

(33)『今昔物語集（五)』(講)巻五 第卅一

四五里許入りて明らかなる野有り。天竺にも似ず，目出たき花，盛りに開けて菓満ちたり。牛を見れば，一の所にして草を食して立ちたり。此の人，此の菓樹を見るに，**赤く黄にして金の如し。**菓一果を取りて貪り愛づと云へども，恐れて食せず。

以上は同一作品からの引用例だが，(29)から(32)までは金が黄色であるかのようだが，(33)では金は必ずしも純粋に黄色ではなく，赤に近いと描写しているのである。以下の

(34)では二つの可能性が考えられる。すなわち，単に金の色が素晴らしいと描写する場合と金の色に段階(グラデーション)を認識する場合である：

(34)『御伽草子（下)』(岩)梵天国

乾の道を，七里程歩み行きて，大木あり。葦毛の馬，月毛の馬，鹿毛の馬三疋あり。葦毛馬のやせたるを牽きて帰り，姫君に此由仰せければ，「秣なくてはいかがすべき」とのたまへば，中納言，「いかなる草の入り候ぞ」と宣へば，「金三千両入るべし」と申させ給へば，やすき程の事とて，北の倉なる**色よき金**，三千両取り出し，大豆三石三斗にさせて，此馬にかはせ給ひける。

意味的に後者と解釈すれば，蔵の中に数多ある黄色に輝く金の中から赤味を帯びた純度の高い金を厳選したとは考えられないだろうか。

尾崎(2006)では，ローマの大プリニウス(Gaius Plinius Secundus)による『博物誌』(*Naturalis historia*)の次の箇所“quin immo quo saepius arsit, proficit ad bonitatem, aurique experimentum ignis est, ut simili colore rubeat ignescatque et ipsum; obrussam vocant”を傍証として，金が赤色であることを証明しようとした。今回も同様に，山相学に関する『山相秘録』や江戸後期の経済学者である佐藤信淵が著した『経済要録』などの実用書を参照してみた。すると，以下の用例が示す通り，金の色に関する貴重な記述に満ちていた：

(35)『山相秘録』金山 第二

凡そ金の山中岩石より採りたる者を**山金**と名づく。其の色**深黄**にして甚だ美なり。又土中・井中・海砂中・流水中より出たる者を**水金**と名づく。其の色**淡黄**なり。故に山金を第一等とし，水金を第二等とす。

(36)『経済要録』(岩)巻之五 開物上篇 七金第六

凡そ黄金の未だ煆煉を經ざる者を生金と云ふ，生金は試金石には著かざる者なり，既に煆煉したるを熟金と云ふ，總べて黄金は初めて煎煉すれば其色**淡黄**なり。再煉するときは赤色を發す，

(37)『経済要録』(岩)巻之五 開物上篇 金器第八

凡そ金箔は大燒金を最上とし，純金を以て製するが故に，**黄赤色**にして光輝くこと日輪の如し，其次を中燒と云ふ，此れも亦金の性極て宜し，藥用及び沃金等に用ゆべきは是なり，佛師箔と云ふものは黄金八百五十匁に銀百五十匁混じへて製す，故に其色**淡黄**なり，青箔と云ふは黄金二百匁に銀百匁を合はせて製す，故に**青色にして赤光なし**，

ここで，金は採取場所や銀の混合度合によって色が違っていたり，純金は赤味を帯びていると明確に述べられている。今後さらに，若尾(1994)に代表される鉱山民俗学の助けを拝借すれば，ますます実りある結果が期待できよう。以上のように通時的に考察してくると，日本では一般に金は黄色の光を放つ金属と認識されがちだが，純度を上げて純金に近づけてゆくと赤っぽい外見をした金属になると実証できた。

Ⅲ

Anderson (2000) は，中世ゲルマン語における*red gold*「赤い黄金」なる表現が「意味的な謎」(semantic puzzle)だと述べた。ところが，筆者には日本語の「白馬（あおうま）」，「緑の黒髪」，「紫磨黄金」などの方がむしろ「意味的な謎」である。今回の調査の副産物として「紫金（＝紫磨黄金）」という表現が現れたが，以下のように辞書の定義もかなり不可解である：

(38)『広辞苑』第六版

し-きん【紫金】赤銅の異称。

し-こん【紫金】紫磨金に同じ。

しま-おうごん【紫磨黄金】「しまごん（紫磨金）」に同じ。

しま-ごん【紫磨金】**紫色を帯びた**精良な黄金。閻浮檀金。紫磨黄金。紫金。

(39)『日本国語大辞典』第二版

し-きん【紫金】［名］赤銅の異称。

し-こん【紫金】［名］（「こん」は「金」の呉音）「しまごん（紫磨金）」の略。

しま-おうごん【紫磨黄金】［名］「しまごん（紫磨金）」に同じ。

しま-ごん【紫磨金】［名］（「ごん」は「金」の呉音）**紫色を帯びた**純粋の黄金。最上質の黄金をいう。紫磨。紫磨黄金。紫金。

さらに，意味解釈を複雑にしているのが，同一の漢字表記でも「きん」と読めば「赤銅」，「こん」と読めば「純金」になるということである。どちらの辞書にも共通する「紫色を帯びた」黄金とはいかなるものを指すのであろうか。以下の用例にはすべて「紫金」が含まれており，括弧内はそれに付された注だが，(42) を除くいずれにも「紫色を帯びた」あるいは「紫がかった」という説明が見られる：

(40)『法華経（中）』（岩）妙法蓮華經提婆達多品第十二

仏は，諸の比丘に告げたもう「その時の王とは，則ちわが身これなり。時の仙人とは，今の提婆達多これなり。提婆達多は善知識たりしに由るが故に，われをして六波羅蜜と慈・悲・喜・捨と三十二相と八十種好と**紫磨金色**と十力と四無所畏と四摂法と十八不共と神通と道力とを具足せしめたり。」

（紫磨金色―**紫色を帯びた**黄金色の意で，仏の皮膚の色を指す。）

(41)『往生要集（上）』（岩）大文第二 欣求浄土

自らその身を見れば，身既に**紫磨金色**の体となり，また自然の宝衣ありて，鐶・釧・宝冠，荘厳すること無量なり。

（**紫がかった**黄金の色。紫磨は金の精ともいえる，金の最上品。）

(42)『往生要集（下）』（岩）大文第十 問答料簡

乃ちこれ**閻浮檀那紫金**にして，重さ十六両，金鋌の長短もまた十六寸なり。

（閻浮檀金に同じ。閻浮は樹の名，檀那は河の意の梵語，紫金は紫磨金と同じで，**紫はもっとも勝れた色を意味し，**金色を形容したもの，磨は濁っていないことを意味する。）

(43)『今昔物語集（二）』（講）巻二 第三

仏，**紫磨黄金**の御手を以て此を受けて，右の手を以て濯ぎ洗ひて，左の手を以て身の瘡を摩で給ふに，御手に随ひて病癒えぬ。

（**紫色を帯びた**精良な黄金。紫磨金。紫金。閻浮檀金。）

(44)『宇治拾遺物語』（角）巻第一五 一〇 秦始皇自天竺來僧禁獄事

此僧「惡王に逢て，かくかなしき目をみる。わが本師釋迦牟尼如來，滅後なりとも，あらたにみ給らん。我を助給へ。」と，念じ入たるに，釋迦佛，丈六の御姿にて，**紫磨黄金**の光をはなちて，空より飛きたり給て，この獄門を踏やぶりて，此僧をとりてさり給ぬ。

（**紫がかった**最上の黄金）

(45)『御伽草子（下）』（岩）梵天国

乾の道を，七里程歩み行きて，大木あり。葦毛の馬，月毛の馬，鹿毛の馬三疋あり。葦毛馬のやせたるを牽きて帰り，姫君に此由仰せければ，「秣なくてはいかがすべき」とのたまへば，中納言，「いかなる草の入り候ぞ」と宣へば，「金三千両入るべし」と申させ給へば，やすき程の事とて，北の倉なる色よき金，三千両取り出し，大豆三石三斗にさせて，此馬にかはせ給ひける。食ひはてて，水飲みて，三度身ぶるひして立ちければ，**紫磨**の如くになりにけり。

（紫磨金（紫磨黄金）の意。**紫色を帯びた**純精の金。良質な金。）

ところで，「紫金」は西洋人の目にも紫色に映るのであろうか。そこで，西洋人の手による日本語の辞典を参照してみると：

(46)『邦訳 日葡辞書』Xima. シマ（紫磨）

例，Xima vogonno fadaye.（紫磨黄金の膚）仏(*Fotoque*)の美しさを強調して言うのに用いる語。仏法語(Bup.)。

(47)『和英語林集成』（講）SHIMA-OGON シマワウゴン 紫磨黄金

n. Purple shining gold -- spoken of the appearance of the body of *Shaka*.

『和英語林集成』の編者はヘボン式ローマ字の創始者でもあるＪ．Ｃ．ヘボンだが，実際に金を紫色と定義しても不思議ではなかったのだろうか。これに関して筆者は甚だ疑問視している。ちなみに，ラテン語でも紫色が金を修飾することが稀にあるようだが，以下は現時点で筆者が知る限り唯一の例である(purpuraが古英語ではrædeste 'reddest'と翻訳されている)：

(48) *Old English Homilies from MS Bodley 343* (*EETS* OS 302)VII.113-16

And þisre weorlde welæ wur(ð)æþ to sore3æ. Þeah we us scrydæn mid þam rædeste golde

and mid þam hwiteste seolfre, and we mid þam fe3ereste 3ymstanes all uten embihangene beon, þeah þe mon sceal ece ende abidæn,

(Quamvis quis in saeculi gloria fulgeat, quamvis purpura auroque resplendeat, quamvis cultu pretioso redimitus emineat, ... semper tamen in poena est, semper in angustia, semper in moerore, semper in discrimine;)

上述の語彙集による定義から，紫金が仏教用語だと予想されため，『岩波 仏教辞典』を参照すると，やはり『広辞苑』と同様に，「紫色を帯びている」ことに固執しているようである：

(49)『岩波 仏教辞典』第二版 紫磨金 しまごん

最高の質をもつ金で，**紫色を帯びている。**中国に古来よりある呼び名(しまきん)であり，〈紫金〉ともいう。その色を紫磨金色という。わが国では時に<閻浮檀金>の別称ともされた。なお，**紫色を最高の色と考えるのは，中国の神仙思想の中にもある。**

いずれにせよ，仏教辞典の場合，紫という色を最高のランクとして，ひいては中国の神仙思想と関連付けようとしている。以下にあるように，そもそも中国の儒教思想では，紫色は赤色と青色の間色であるため，忌み嫌われていたはずである：

(50)『論語』(岩)巻第九 陽貨第十七

子曰，**惡紫之奪朱也**，惡鄭聲之亂雅樂也，惡利口之覆邦家，

子の曰わく，**紫の朱を奪うを悪む。**鄭声の雅楽を乱るを悪む。利口の邦家を覆すを悪む。

そこで，神仙思想，すなわち道教に注目してみた(古代日本でも道教はかなりの影響力を持っており，聖徳太子の冠位十二階などもその影響を受けているとされる)すると，以下の記述において，道教の中で紫色を最高の色の位に位置付けるに至った理由に遭遇した：

(51)『道教と古代日本』14-15

その**紫色**が西暦前三―二世紀，秦漢の時代から宇宙の最高神として文献上に出現する太一神の住む宮殿を象徴する尊貴な色とされ(『淮南鴻烈』天文篇)，ないしは太一神を祭る漢の皇帝たちの甘泉宮に設けた祀壇もしくは祭場の幄を象徴する聖なる色とされるのは(『漢書』礼楽志，『文選』揚雄「甘泉賦」)，太一神が漢代に北極星の神格化されたものと解釈され，その北極星の天空から地上に放つ光芒が**紫色**とされたからであった。

次に，数多ある道教に関する文献の中から葛洪作の『抱朴子内篇』を選択して調査してみたが，「紫金」は次の２例しか得られなかった(ちなみに，金銀を「黄白」と呼ぶように，ここでも金は黄色と見なされている)：

(52)『抱朴子内篇校釋』巻十一 仙藥（岩）

赤者如珊瑚，白者如截肪，黑者如澤漆，青者如翠羽，**黃者如紫金**，而皆光明洞徹如堅冰也。

（赤き者は珊瑚の如く，白き者は截肪の如く，黒き者は澤漆の如く，青き者は翡翠の如く，**黄なる**者は**紫金**の如くにして，皆光明洞徹して堅冰の如し。）

(53)『抱朴子内篇校釋』巻十六 黄白（岩）

注地上凝，則成上色**紫磨金**也。

（地上に注ぎて，凝れば則ち上色の**紫磨金**と成るなり。）

また，唐の玄奘(いわゆる三蔵法師)が供を連れて天竺に向かう『西遊記』も実際には道教の影響が濃いため，「紫金」という表現の使用状況を調べてみたが，わずか十数例しか見付からなかった。(38)および(39)に挙げた日本語の事情と同様に，「紫金」という漢字表記のため，赤銅を指すのか，純金を指すのか不明な場合が多かった：

(54)『李卓吾評本 西遊記』第四回（訳：岩）

猴王聽説，教:「取我披掛來！」就戴上**紫金**冠，貫上黄金甲，登上步雲鞋，手執如意金箍棒，領衆出門，擺開陣勢。

（それを聞くと，悟空は，「わしのよろいかぶとを持ってまいれ」と言いつけ，さっそく**紫金**の冠を戴き，黄金のよろいをまとい，歩雲履をはき，如意金箍棒をたずさえ，軍勢を率いて門を出，陣を張ります。）

(55)『李卓吾評本 西遊記』第十二回（訳：岩）

朕又有一個**紫金**鉢盂，送你途中化齋而用。

（それから，わしのところに**紫金**の鉢がある。それをそなたに進ぜるゆえ，道中，托鉢のために用いるがよい。）

(56)『李卓吾評本 西遊記』第三十三回（訳：岩）

二魔道：「拿我的**紫金**紅葫蘆，你的羊脂玉浄瓶。」

（「おれの**赤銅**の紅葫蘆と，兄貴の琥珀の浄瓶さ」）

このように，今回の調査では主要作品を概観したに過ぎないが，非常に複雑な問題を孕んでいると言える。今後は仏教・道教を問わず，調査範囲を随時拡大してゆき，鳩摩羅什による仏典翻訳やサンスクリット原典なども視野に入れなければならない。

最後に，明治時代の日本人が「紫(磨黄)金」をどのように捉えていたかを見てみた。１９０５年刊の上田敏による訳詩集『海潮音』に２例見られた(括弧内はフランス語による原文である)：

(57)『海潮音』(新)大飢餓(Sacra fames)

夢円なる滄溟，濤の巻曲の揺蕩に ／ 夜天の星の影見えて，小島の群と輝きぬ。／ **紫磨黄金**の良夜は，寂寞としてまた幽に，／ 奇しき畏の満ちわたる海と空との原の上。

(L'immense mer sommeille. Elle hausse et balance / Ses houles où le ciel met d'éclatants îlots. / Une nuit d'or emplit d'un magique silence / La merveilleuse horreur de l'espace et des flots.)

(58)『海潮音』(新)床(Le Lit)

天離る鄙の伏屋も，百敷の大宮内も，／ **紫磨金**の栄を尽して，紅に朱に矜り飾るも，／ 鈍色の樫のつくりや，楓の木，杉の床にも，

(Humble, rustique et clos, ou fier du pavillon, / Triomphalement peint d'or et de vermillon, / Qu'il soit de chêne brut, de cyprès ou d'érable,)

興味深いことに，フランス語では*or fin*ではなく，単なる*or*である。ここで紫磨(黄)金が訳語として選択されたのは，リズムを重んじる韻文であったためとも考えられる。ところが，以下の用例では「紫磨」が銀を修飾しているため，紫色とは無関係に「最高」を表す言葉として理解されていたことが分かる：

(59)『宮沢賢治詩集』(岩)風景とオルゴール

下では水がごうごう流れて行き / 薄明穹の爽かな銀と苹果とを / 黒白鳥のむな毛の塊が奔り / 《ああ　お月さまが出てゐます》/ ほんたうに鋭い秋の粉や / 玻璃末の雲の稜に磨かれて / **紫磨**銀彩に尖って光る六日の月 / 橋のらんかんには雨粒がまだいっぱいついてゐる

「紫金」に関しては，日本語においてもさらに考察の余地があり，成立年代やジャンルのみならず，韻文・散文による相違にも注目した十分な調査が完了しない限り，満足のゆく結果は得られない。

Ⅳ

本論は，日本の古代から近代に至るまで「金」が持つ色の追求を試みたものである。まず，金は黄色であるという既成の定義に始まって，純度が上がれば実際に赤く見えて，宗教が関与すれば紫色で形容されることもあると指摘した。

「てんてん手毬は　殿様に　だかれてはるばる　旅をして　紀州はよい国　日のひかり　山の蜜柑になったげな　**赤い**蜜柑に　なったげな　なったげな」とは「鞠と殿様」の歌詞である。ここで「赤い蜜柑」と歌われているが，筆者の感覚で言えば蜜柑は橙色であり，決して赤色ではない。このような色彩感覚というものは，年齢差，方言差(ひょっとすると性差)などいろいろな要素が絡み合う。本論のように，果たして金の場合はどうであろうか。金は何色かと聞かれれば，ほとんどの日本人が金色と答えるであろう。では，黄色か赤色かと尋ねられればどうであろうか。これは微妙だが，恐らく黄色の方が優勢を占めるのではなかろうか。ところが，本論にあるように「金」と「純金」は全くの別物である。今回の調査で純金は黄色よりも赤色に近いという事実を，独断による仮定ではなく実例に則した客観的な説明で試みたつもりである。これにより「赤い黄金」という表現を多用したゲルマン語と同じインド・ヨーロッパ語族に属するロマンス語は「赤い黄金」をまったく無用のものとし，系統的にはまったく無関係な日本語の方が「赤味を帯びた金」を使おうとする土壌があるという結果となった。

今回は黄や赤や紫といった文字を追ったため，意識的に漢文で書かれた文学作品を中心に調査を行ったが，かな文学までは手が回らなかったというのが事実である。したがって，今後は『枕草子』などの文献をつぶさに当たってみれば，案外興味深い事実が得られるかも知れない。

＊本論文は，言語文化レトリック研究会第65回例会（平成20年６月26日・於大阪大学大学院言語文化研究科）における発表原稿に加筆・修正を施したものである。

引用例に付された（岩），（角），（講）はそれぞれ「岩波文庫」，「角川ソフィア文庫」，「講談社学術文庫」を指すものである。旧字体・新字体の取り扱いもできる限り引用した版に従った。

なお，ロシア語に関しては大阪大学非常勤講師の前田恵先生から，中国語に関しては佛教大学の瀬邊啓子先生から貴重なご助言をいただいた。ここに記して篤くお礼申し上げる次第である。

主要参考文献

Ａ. 一次資料

『續日本紀 前篇』 黒板勝美編 國史大系 [普及版] 東京：吉川弘文館，1968.

葛洪 『抱朴子内篇校釋』 第２版 王明撰 北京：中華書局，2002.

呉承恩 『李卓吾評本 西遊記』 全二冊 上海：上海古籍出版社，1994.

佐藤信景・佐藤信季・佐藤信淵 「山相秘錄」『第三部 産業技術篇 採鑛冶金 (一)』 三枝博音編 『日本科學古典全書』 第九卷 東京：朝日新聞社，1942.

Ｂ. 二次資料

Anderson, E. "The Semantic Puzzle of 'Red Gold'." *English Studies* [Amsterdam: Swets & Zeitlinger] 81.1 (2000).

尾崎久男 「*Rotes Gold* か *aurum rutilum* か？ ―中世ゲルマン諸語における「赤い黄金」について―」 *Sprachwissenschaft Kyoto* 5 (2006).

谷川健一 『金属と地名』 東京：三一書房，1998.

福永光司 『道教と日本文化』 東京：人文書院，1982.

福永光司 『道教と古代日本』 東京：人文書院，1987.

福永光司他 『日本古代史・新考 道教と古代の天皇制』 東京：徳間書店，1978.

松田壽男 『古代の朱』 ちくま学芸文庫 東京：筑摩書房，2005.

村上 隆 『金・銀・銅の日本史』 岩波新書 (新赤版)1085 東京：岩波書店，2007.

若尾五雄 『黄金と百足：鉱山民俗学への道』 東京：人文書院，1994.

『岩波 仏教辞典』 第二版 東京：岩波書店，2002.

『邦訳 日葡辞書』 東京：岩波書店，1980.

『例文 仏教語大辞典』 東京：小学館，1997.